季寄せ―草木花

春〔上〕

選・監修　山口誓子
写　真　冨成忠夫
解　説　本田正次

0392-258044-0042

季寄せ——草木花〔春・上〕

朝日新聞社編

定価　一八〇〇円

発行　昭和五十五年二月一日第一刷
　　昭和五十五年三月十日第三刷

発行者　朝日新聞社　波多野公介

発行所　東京　名古屋　大阪　北九州　朝日新聞社

印刷所　凸版印刷株式会社

©朝日新聞社一九八〇

季寄せ―草木花

選・監修　山口誓子／写真　冨成忠夫／解説　本田正次

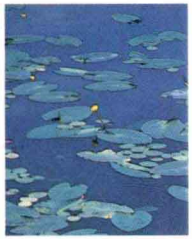
朝日新聞社

選・監修　山口誓子
写　真　冨成忠夫
解　説　本田正次
植物画　佐藤達夫
例句選　梅本景太郎
装　幀　多川精一
レイアウト
題　字　川口芝香

春〔上〕

春〔下〕

夏〔上〕



夏〔下〕

秋〔上〕

秋〔下〕

冬

お読みになる前に

●このシリーズは、七巻（秋上・下・冬・春上・下・夏上・下）で構成しており、この巻は春の上です。

●春は立春（二月四日ごろ）から立夏（五月五日ごろ）まで。季節のわけ方は従来の歳時記に準拠し、開花の時期などが大幅に違うものは解説にそれを説明しました。

●季語は草、木、花に限定しましたが、一部なじみの深い菌、藻も植物季語として含まれています。

●季語の配列は、東京を中心に花や実を見るのが早い順とし、たとえば季節中咲いている花などはその咲き始めの時期をとり、本田先生に配列していただきました。

●季語は俳句でよく知られているものを主見出しとし、別名、異名、方言名、古名などを併記しました。見出し季語の右側に現代かな、左側に旧かなをつけ、別名などは現代かなに統一しました。

●例句は原作通りとし、かなづかいは原作に従いました。漢字は原則として新字体とし、新字体のないものは旧字体にしました。

●例句のルビは、原作についているものはそのまま生かしました。読みやすくするために編集部でつけたものもあります。

●解説は植物の標準和名に統一しました。季語と植物解説との見出しが一致しないのは、解説は正しい植物名で、季語は俳句でよく使用されている呼び名を優先的に採用したためです。

●植物名の漢字は論議の多いところですが、できるだけ漢字で表記し、従来よく使用されているものの、明らかに間違っているものは除外しました。

●例句は季語にふさわしい句を収集、選句したものをもとに、各巻の監修選者がさらに編集に合わせて選びました。

●例句は古典は名（号）だけ、現代俳句は姓名とし、配列は、原則として古典を先にしましたが、必ずしも年代順ではありません。

●季語索引には春上と春下とを合わせ春全体の季語をのせました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

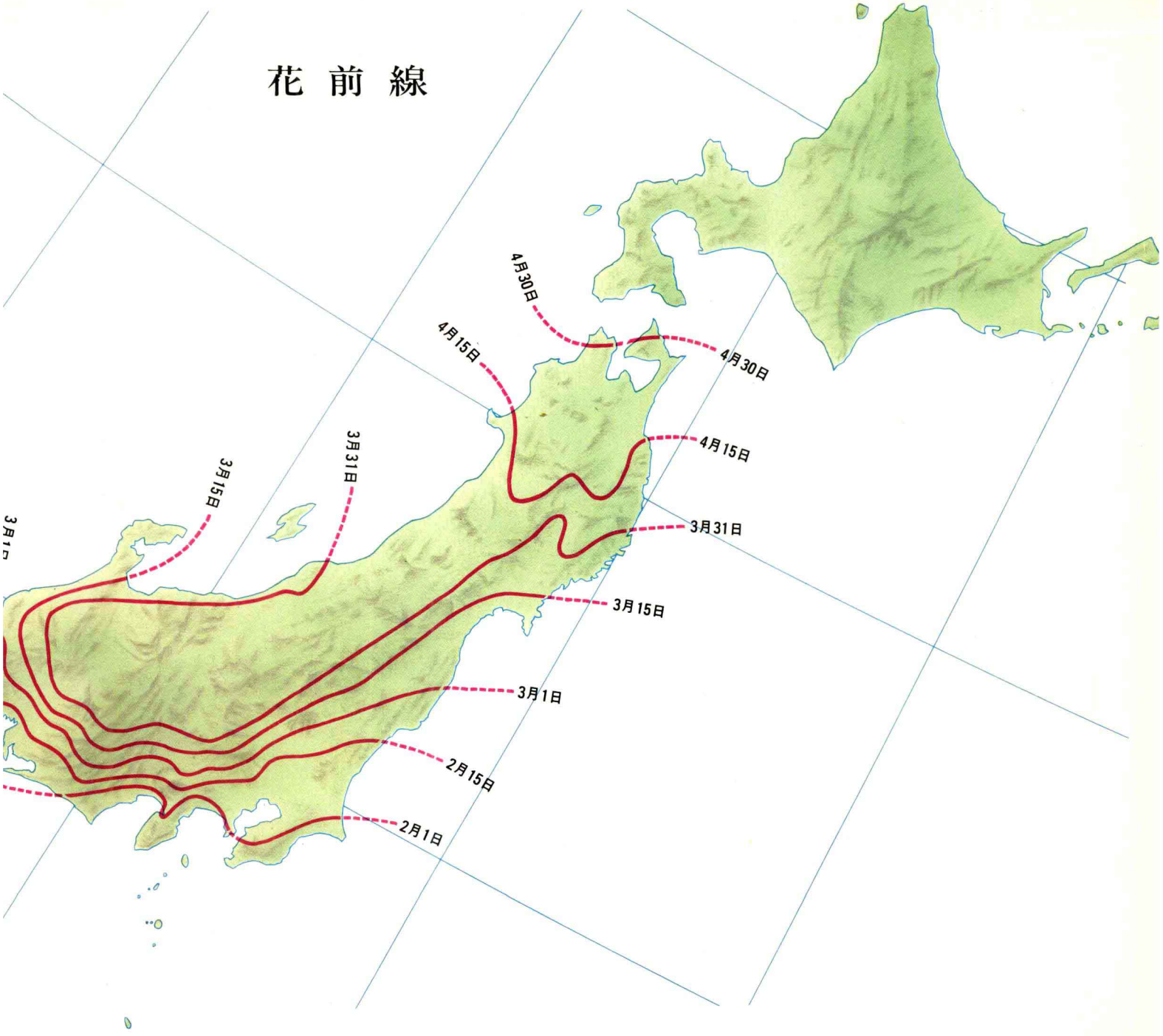
目次

梅／9
紅梅／11
山茱萸／13
黄梅／13
金縷梅／14
猫柳／15
末黒の芒／16
下萌／16
いぬふぐり／18
節分草／21
菠稜草／21
洲浜草／22
馬酔木の花／23
三椏の花／24
辛夷／24
畦青む／26
蕗の薹／27
桃の花／29
椿／32
雉蓆／34
片栗の花／34
若草／36
春の草／37
山吹草／39
錨草／39
筆龍膽／40
一人静／40
化偸草／42
熊谷草／43
こごみ／45
ととき／45
鬼縛の花／46
ミモザ／46
牡丹の芽／48
薔薇の芽／49
蒲公英／51
菫／52
花／55
桜／57
初花／58
彼岸桜／58
山桜／60
八重桜／62
枝垂桜／62
遅桜／64
残花／65
落花／66
茎立／69
三葉芹／69
春菊／70
防風／70
薺の花／72
青麦／72
春落葉／74
満天星の花／74
木蓮／76
連翹／79
沈丁花／80
紫荊／81
蠟弁花／82
木の芽／82
楓の芽／84
柳の芽／85
芽立ち／86
椶の芽／88
山椒の芽／89
苗代茱萸／90
黄水仙／90

赤楊の花／92
杉の花／93
桑の花／94
令法／95
貝母の花／97
五加木／97
菊の苗／98
蒜／99
韮／100
胡葱／101
土筆／102
蕨／104
薇／105
ものの芽／106
双葉／107
草の芽／108
雪間草／109
古草／109
艾／109
海苔／110
青海苔／110
水菜／111
蔦の芽／111
種芋／111
春の苺／112
若布／112
花前線＝ウメ――大後美保／6
キクザキイチリンソウ・コブシ――佐藤達夫・画／113・117
俳句に対する考え方――山口誓子／114
高嶺の花をたづねて――村井米子／118
桜を追って――太田洋愛／123
園芸植物の四季――塚本洋太郎／129
植物語源考④　牧野植物図鑑の和名の語源――深津正／133
索引／138
編集ノート／143

目次カット・小原雅子

花前線


4月30日
4月15日
4月30日
4月15日
3月31日
3月15日
3月31日
3月15日
3月1日
2月15日
2月1日

ウメ

ウメの花が咲き始めると、まだ厳寒期なのに何か春の訪れをおぼえ、明るい気分になる。ウメの種類は多いが、花の色で大別すると白い花と紅い花のものとがあり、あまり厳密に品種を限定しないで、気象台では、明治以来白梅と紅梅として開花期が調べられていた。それによると、一般に紅梅は白梅よりも一週間くらい遅れて咲く傾向があり、花の寿命は南の地方で十五ないし二十日、北の地方へ行くほど短く、東北地方では十日くらいである。サクラの開花前線が九州南部に上陸してから、北海道に達するまで、ふつうの年で約一カ月くらいであるのに対し、ウメの開花前線はサクラの三分の一の速さでゆっくりと北上し、三カ月もかかる。

梅（うめ）

白梅　野梅（のばい）　梅林　梅園　梅が香　盆梅

梅が香にのつと日の出る山路かな　芭蕉

崖急に梅ことごとく斜なり　正岡子規

東より春は来ると植ゑし梅　高浜虚子

白梅や日光高きところより　日野草城

峡せまりわづかに存す梅花村　富安風生

夜の畦を偃（は）ふ梅ありて行きがたし　水原秋桜子

活けし梅一枝強く壁に触る　山口誓子

〔ウ　メ〕

ウメの花の咲くころはまだ寒い日が多く、日本の花暦でもフクジュソウとともに一月の花となっている。しかしウメは百花に先がけて花を開くといわれ、花といえば春であるから、春の花の筆頭として考えられるのであろう。実際からみても所により、また品種によって一月から三月まで続いて花が見られるのがふつうである。ウメは中国原産で中国の国花とされ、日本のウメという名も中国名の梅（メイ）から転訛したものといわれている。しかし学者によっては九州にも野生があるという人があるが、定説とはなっていない。おそらく栽培種が野生化したものと思われる。万葉のころに中国から渡来して、舶来尊重の気風から当時は日本原産のサクラよりもむしろウメのほうが文人墨客の間にもてはやされたのだろう。

ウメはふつう白、淡紅、紅などの花の色によって白梅と紅梅とに分け、また一重、八重、大輪、小輪、果実の大小その他の違いによっても多数の品種に分けており、それぞれに品種名があるが、大別すると野梅系、紅梅系、豊後系の三つとなる。ウメには一見種類や品種が非常に多いように見えるが、品種名がいかに多くとも、植物学上の名はウメである。

古来ウメの名所として関東では史跡と名勝に指定されている水戸の偕楽園をはじめ、埼玉県の越生（おせ）、東京都の湯島天神、亀戸天神、青梅、五日市、神奈川県の大倉山、曽我、小田原、静岡県の熱海、関西では京都の北野天神、名勝指定の奈良県の月ケ瀬梅林、賀名生、和歌山県の南部などが知られている。また名

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

阿蘇の険此処に沈めり谷の梅　古賀晨生

匂ひくる梅に吾より寄つて行く　梅本景太郎

梅園に野点真紅な傘を立て　長田白日夢

盆梅の枝垂れし枝の数へられ　松本たかし

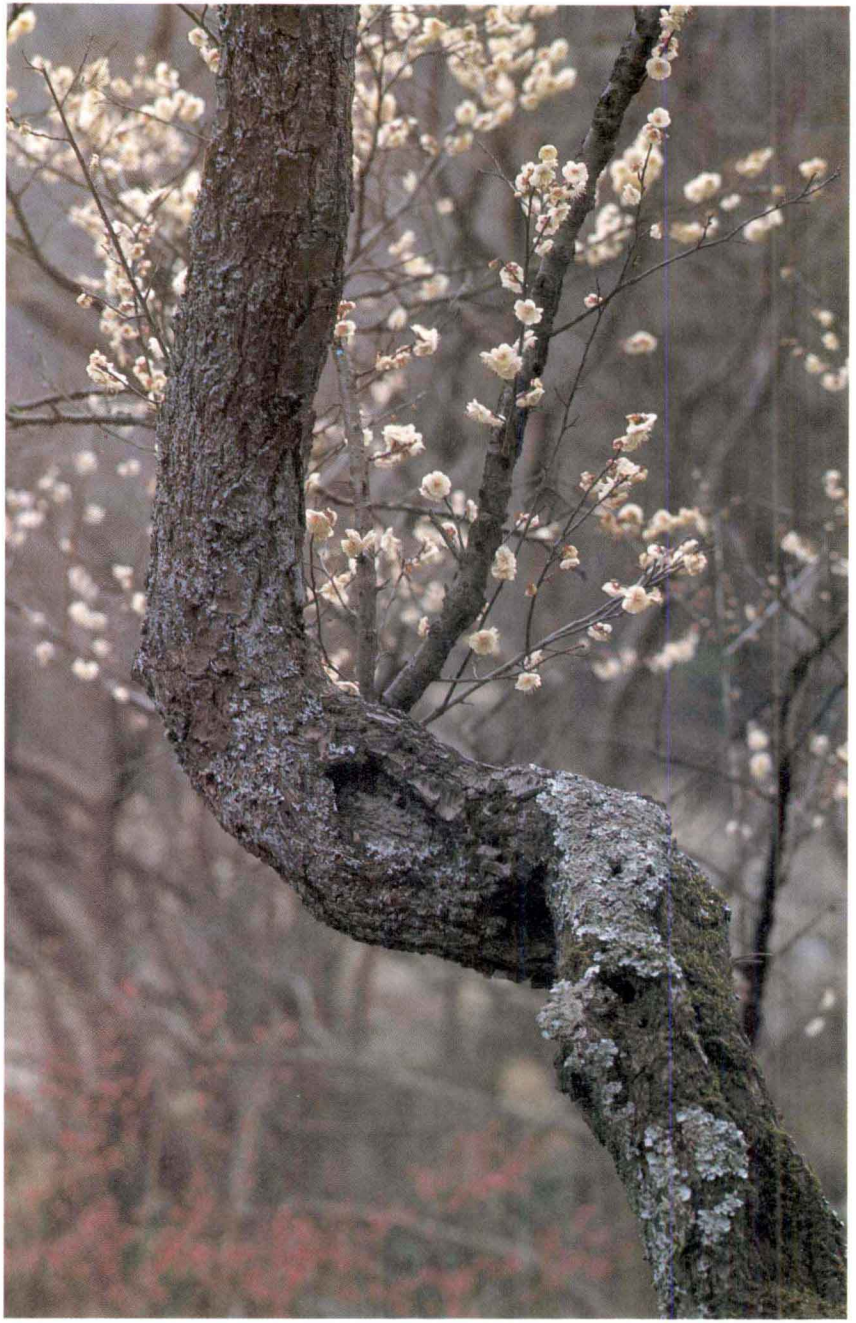
梅林を行き盆梅は踞み見る　橋本大三

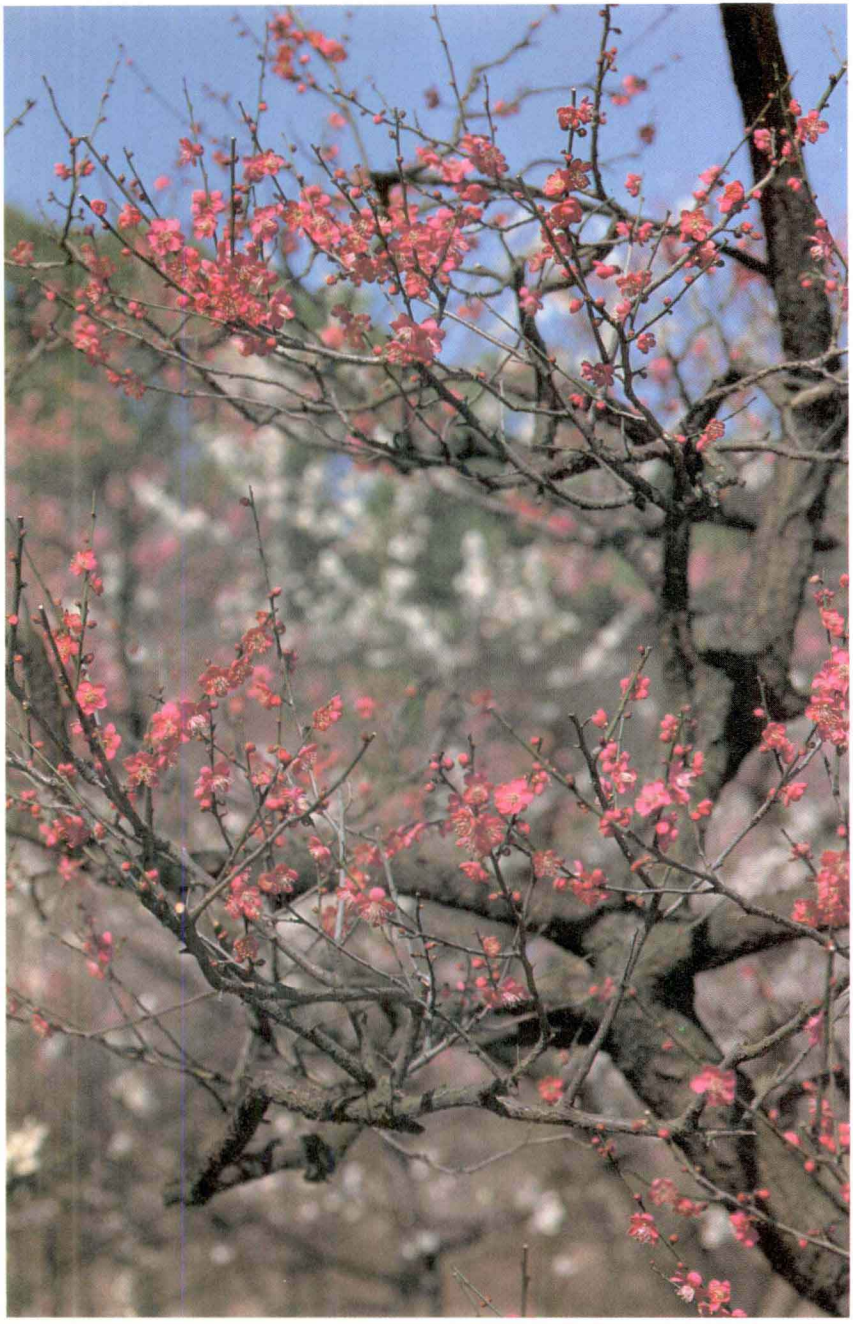
盆梅の真青き枝の四方にたれ　広田青陽

木では鶯宿梅、箙の梅、飛梅などがある。

国の天然記念物では宮城県仙台市の「朝鮮ウメ」、山口県柳井市の「余田臥龍梅」、宮崎県新富町の「湯ノ宮の座論梅」、同じく高岡町の「高岡の月知梅」、鹿児島県東郷町の「藤川天神の臥龍梅」などがある。

盆梅は盆栽仕立てにしたウメのことで、単なる鉢植えのウメという意味ではない。盆栽の区分ではカエデなどとともに十把一からげで雑木に分類されていて、いささか気の毒な感がないでもない。盆梅は江戸時代に始まったといわれ、枝垂れのものもよく見られる。





紅梅（こうばい）

紅梅の紅の通へる幹ならん　高浜虚子

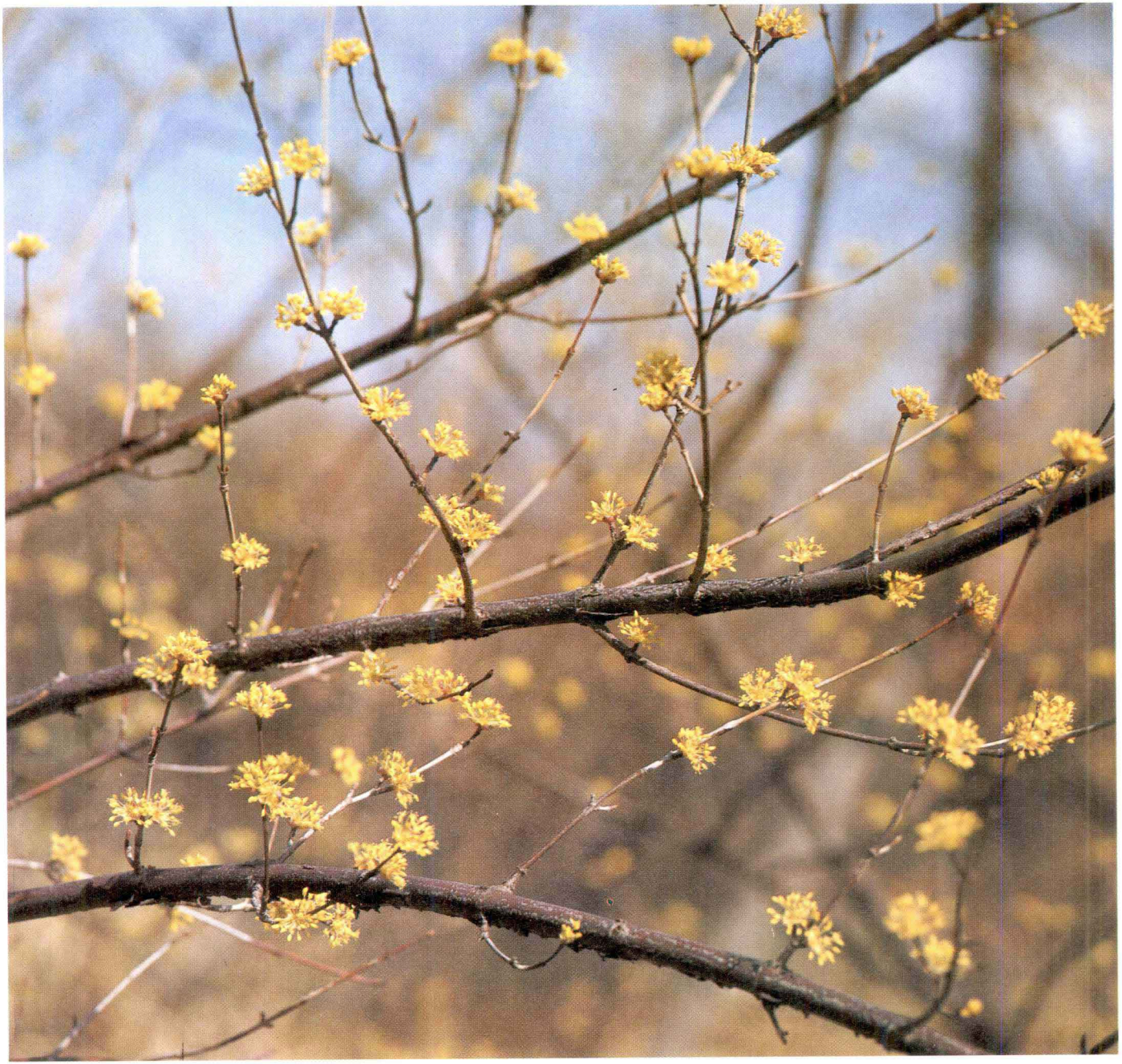
伊豆の海や紅梅の上に波ながれ　水原秋桜子

僧とてもこころときめく紅梅花　山口誓子

紅梅の紅のただよふ中に入る　吉野義子

〔紅　梅〕

ウメはふつう花の色によって白梅と紅梅とに分け、紅梅は花の色が主として紅色系統の品種である。例外はあるが、花の咲く時期が白梅よりやや遅くなる。紅梅の代表品種は、「紅千鳥」で、雄しべの一部が弁化してチドリの飛ぶ姿を思わせる。「緋梅」は芯の色がとくに濃い。「寒紅梅」、「道知辺」なども紅梅であり、近ごろよく植えられる「思いのまま」は、一株に白花と紅花とが咲き分けとなっている。紅梅の花は派手で美しいが、白梅の気品には及ばない。



山茱萸の花

秋珊瑚　春黄金花

さんしゆゆの盛りの枝の錯落す　富安風生

さんしゆゆの花のこまかさ相ふれず　長谷川素逝

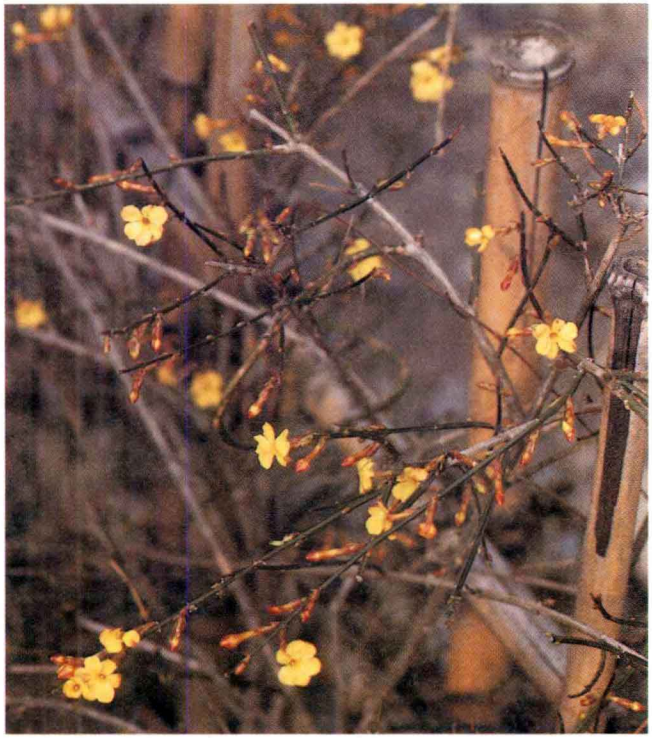
山茱萸をいまの齢のよしとする　山口誓子

さんしゆゆの花に寺田の水あかり　木下青嶂

黄梅

迎春花

生花の師匠黄梅かかへ来し　大岡久之



〔サンシュユ〕

ミズキ科の落葉小高木で、朝鮮半島や中国が原産地。日本には享保年間に薬用として果実が渡来し、収斂剤、強精剤として用いられたが、いまでは薬用よりも観賞用として庭などに植えられている。徳川幕府の御薬園だった東京・小石川の植物園にはサンシュユの古木がある。高さは六、七メートルになり、枝がよく茂る。幹や枝の皮がよくはげて特異な模様が見られる。三月ごろ葉が出る前に、枝の先端に黄色の小さな花が球のように集まって開き、少し離れて見ると全体が真っ黄色に見えて美しい。花は四弁。中国の山茱萸をこれとは別とした牧野富太郎は、これにハルコガネバナという新しい名前をつけた。秋に楕円形をした紅色の実がなり、アキサンゴという別名もある。

宮崎県の民謡『稗つき節』の中にある「庭のサンシュの木……」はサンシュユではなくて、ミカン科のサンショウの木と思われる。早春の花木で黄色の花といえば山ではマンサク、庭ではこのサンシュユが代表格であろう。

〔オウバイ〕

モクセイ科の落葉小低木で中国の原産である。日本への渡来は明らかではないが、『花壇地錦抄』（一六九五年、伊藤伊兵衛著）にその名前がでており、かなり古くから日本に入っていたらしい。観賞用として庭に植えられることが多い。黄梅とはいってもウメの種類ではなく、ジャスミンの仲間である。しかしジャスミンのような芳香はない。枝は細長く、緑色をなし、ややつる状となって垂れ、地面につくと根を出す性質がある。葉は対生、三小葉の複葉で、鮮黄色の花は早春のころ葉が出る前に、前年枝の各節に対生して開く。花冠は六裂する。漢名を迎春花という。

金縷梅（まんさく）

まんさくや杣の負荷に鎌ひかり　吉沢卯一

まんさくや行者の岩に鎖垂れ　曽祇もと子

〔マンサク〕

二月、三月と暦は進んでも余寒がつづく早春、万花にさきがけて「先ず咲く」が訛ってマンサクの名ができたといわれているように、花弁のちぢれた黄色い花は春の先ぶれである。花弁四、萼（がく）片四、雄しべ四という四ずくめが、まるで切紙細工でも見るように手足を四方に伸ばしたような格好は、まさに豊年満作の踊りでもあろう。またマンサクを事実満作の意味だとする学者もある。日本固有の種類で、山地に野生するマンサク科の落葉小高木であり、本州から九州に分布している。漢名はない。

猫柳（ねこやなぎ）

えのころやなぎ

猫柳高嶺は雪をあらたにす　山口誓子

猫柳奈良も果なる築地（ついぢ）越し　加藤楸邨

湖よりも流がまぶし猫柳　米沢吾亦紅

猫柳今も煙の汽車通る　関義明

〔ネコヤナギ〕

北海道から九州まで、川辺や山の渓流などにふつうに野生しているヤナギ科の落葉低木で、高さは二、三メートルぐらい。早春まだ寒さを覚えるころ、葉が出る前に銀ねずみ色をした楕円形の花穂をつけ、苞から出た絹毛が密生して小ネコを思わせるのでこの名がある。もろもろの花が少ないときだけに、花穂の輝きは人目をひき、花材にも使われる。雌雄異株で、とくに雄花穂にある雄しべが目だつ。この雄しべは二本が一本に合着した特殊なものである。ちなみに、ネコヤナギはもちろん、ヤナギ類の花穂を「ねこ」という。

秦の水図書館蔵書

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com